1900s

1910s

1920s

1960-80s

2010s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 2 号　2019年1月31日

目　次

〔巻頭コラム〕1962年3月18日
逸見勝亮 …… 2
北大歴史ノート 第２話
北海道大学家政学部 …… 4
北大風景グラフⅡ
橋の周辺（中央ローン北側）…… 5
〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ …… 6
〔活動紹介〕日誌 pick up …… 7
編集後記等 …… 8

〔巻頭コラム〕

1962年3月18日

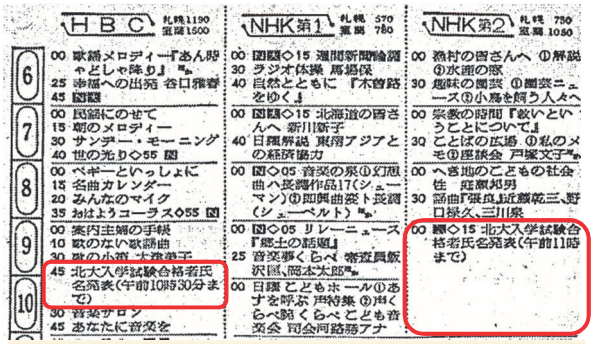
逸見　勝亮
（北海道大学名誉教授）

◇小稿の目的は、筆者が入学した1962年度の北大合格者の出身高校を確かめることである。

『北海道大学一覧　昭和三十七年』に教養部在籍者氏名（本籍都道府県名）は載っているが、合格者氏名・出身校を掲載してある資料は、新聞以外には見当たらない。

1962年度北大教養部の学生編成・募集単位毎の定員・志願者は、文類（270・2,337名）、理類（893・3,808名）、水産類（205・1,041名）、医学進学課程（80・454名）であった（『北大百年史　通説』中「統計」209頁）。競争率はそれぞれ8.7、4.3、5.1、5.7倍であった。

北大は、3月3日（国語・社会・理科）、4日（英語・数学）に入学試験を実施し、3月18日午前9時10分から中央講堂（クラーク会館北側に位置していたが、1964年11月に取り壊された）の特設掲示板に、合格者の受験番号を貼り出した。NHK第二放送は午前9時15分に、HBCラジオは9時45分と午後2時に「北大入学試験合格者氏名発表」を組み、氏名・出身高校を報じた。HBCテレビは11時から「北大入試合格者発表＝北大構内」で掲示板を中継した（1962年3月18日付『北海道新聞』朝刊、放送番組欄）。そして、各紙夕刊が合格者氏名（出身高校）を載せた。ニュース源はいうまでもなく大学が提供した名簿である。



1962年3月18日のラジオ番組欄

◇「北大入試合格者」（1962年3月18日付『北海道新聞』夕刊）をもとに、募集単位毎の都道府県別合格者数（高校数）を以下に掲げる。ただし、合格者1名の場合は高校数を省く。

《文類》

北海道274(59、検定1)、東京12(12)、大阪4(3)、愛知3(3)、静岡3(3)、香川3(3)、福岡3(3)、茨城3(1)、栃木2(2)、長野2(2)、埼玉2(2)、岩手2(1)、福島1、群馬1、神奈川1、京都1、兵庫1、愛媛1、岡山1

道外出身者は46名（18都府県、42校）、文類合格者320名の14.4%であった。

《理類》

北海道536(79)、東京85(42)、愛知36(16)、大阪25(17)、神奈川25(11)、静岡17(11)、兵庫16(11)、長野14(7)、埼玉14(5)、福岡13(10)、広島12(6)、青森12(4)、千葉9(6)、茨城9(2)、栃木8(6)、富山7(5)、岩手7(4)、群馬7(4)、秋田7(3)、福島6(4)、山口6(3)、山形5(3)、福井5(3)、高知5(2)、新潟4(4)、岡山4(4)、島根4(4)、香川4(4)、宮崎4(4)、石川4(3)、岐阜4(2)、山梨3(3)、京都3(3)、愛媛3(3)、三重3(2)、和歌山2(2)、鳥取2(2)、佐賀2(2)、徳島2(1)、宮城1、滋賀1、奈良1、大分1、熊本1、鹿児島1

道外出身者は404名（44都府県、234校）、理類合格者940名の43%であった。

《水産類》

北海道143(51)、東京11(11)、愛知7(7)、大阪6(5)、静岡4(4)、福岡3(3)、福島3(2)、栃木2(2)、埼玉2(2)、長野2(2)、兵庫2(2)、岡山2(2)、秋田1、山形1、茨城1、群馬1、神奈川1、新潟1、福井1、富山1、岐阜1、島根1、香川1、愛媛1、高知1、大分1、鹿児島1

道外出身者は59名（26都府県、57校）、水産類合格者202名の29.2％であった。

《医学進学課程》

北海道51(29)、東京9(8)、兵庫3(2)、青森2(2)、栃木2(2)、山形2(1)、山梨2(1)、長野2(1)、山口2(1)、秋田1、福島1、埼玉1、千葉1、神奈川1、静岡1、福井1、石川1、愛知1、京都1、鹿児島1

道外出身者は35名（19都府県、29校）、医学進学課程合格者86名の40.7％であった。

◇新聞記事の合格者氏名（出身高校）には、「関東学院六浦」「吉田島農林」「城南」などと府県名を略してある例も散見された。「六浦」「吉田島」は地名と考えて、何れも神奈川県所在校とたどり着けたものの、「城南」がいずれの府県に所在する高校なのかは判断がつかなかった。そこで『北海道大学一覧　昭和四十一年』所載卒業者名簿で、「城南」出身者氏名の卒業学部・学科を確認し、さらに同学科を卒業した筆者の知友に出身学校の問い合わせを依頼して、京都府立城南高校と確定した。上記理類合格者中「京都3」の1名は、京都府立城南高校出身である。

◇入学者（合格者）は文類275（320）名、理類880（940）名、水産類186（202）名、医学進学課程85（86）名であった。『北海道大学一覧　昭和三十七年』中の教養部学生名簿には、沖縄出身学生2名、特別入学外国人学生4名を確認できる。

なお、合格者中122名が入学しなかった事情を示す資料は見当たらない。

◇1962年度の大学短大進学率は、12.8％（男子18.１％、女子7.4％）であった。筆者が属していた高校のクラスの進学者は10％もいなかった。進学率の多寡を論ずる価値はあるだろうが、高校卒業で自立可能な条件が地域には備わっていたことが、18歳の青年には重要であった。

1961年に観たホットストリップミルの鋼板製造工程は、筆者を圧倒した。1962年度には、地元製鉄業は現業部門に初めて普通科卒業生を採用した。級友たちは、鉄鋼・造船・石油・金融などの企業に次々と採用された。仕事の選択を4年も先送りした者は、翌月から仕事に就く級友たちの間で、勉強への漠然たる憧れを口にすることもかなわず、ぐずぐずとしていた。

理類に合格した友人は、父親は北大理学部卒、次兄は理学部在学中、叔父は獣医学部教授であり、当然の進路選択に屈託はなかった。しかし、筆者ときたら入学金・授業料・生活費をどのように捻出するのか、大学と都会の暮らしを想像するに暗澹たらざるを得なかった。

1962年3月18日は今に連なる苦悩の初日であった。

◇文類に京都府から合格した1名は宮津高校出身で、教養部は同じ3組、経済学部へ進んだ。理類に鹿児島県から合格した1名は甲南高校出身で理学部地質学鉱物学科へ進み、富山県出身者7名中の1名は魚津高校出身で、同じく理学部地質学鉱物学科へ進んだ。北海道富良野高校から理類に合格した3名中の1名は南新川の下宿で一緒だった。そして、大型犬を見かける度に、彼が飼っていたという樺太犬を想う……

「北大入試合格者」記事――そこには、別の大学を選択した小学校で5年間同じクラスだった友達の名もあった――を行きつ戻りつし、知った名前や顔を思い浮かべ、知らなかった高等学校の所在地を地図で確かめたりもしたのである。

1962年北大祭1年3組の仮装行列
前列右から3番目が市電運転手に扮した著者

北大歴史ノート　第２話
北海道大学家政学部

これは、かつて計画されながらも、ついに実現に至らなかった学部だ。

＊

1960年7月20日の評議会議事録に「家政学部の設置要求について」という議題がある。杉野目晴貞学長の発議によるものだった（農学部教授会記録、1960年7月18日）。添付の設置主旨や学部構成案によれば、以下の12講座が予定されていた。

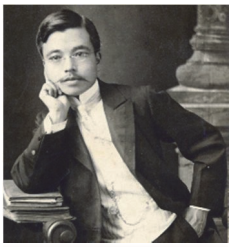
1. 経済（家計経済）
2. 経済（消費経済）
3. 経済（消費金融）
4. デザイン及び工作
5. 伝達普及及び教育
6. 食糧及び栄養（農家の調理・貯蔵・加工等）
7. 食糧及び栄養（公共・厚生施設等）
8. 繊維品及び衣服
9. 住宅（農家住宅・衛生施設）
10. 住宅（什器、特に冷蔵・洗濯・調理・清掃等）
11. 育児・老人養護・一般家族関係
12. 家庭の保健、衛生

はじめに衣食住ではなく経済がくるのが面白い。講座内には、消費者教育(2)、保険や相続(3)、新聞・テレビ・ラジオなどのマス・メディア(5)といった項目もある。国民経済の「消費に関する理論、応用及び教育」のために旧帝大で初となる「家政学部」の設置をめざす、という主旨に基づき、総合的な研究体制が整えられていた。

＊

ところで、戦前の北大にもこうした研究をおこなう人物がいた。森本厚吉（1877－1950）だ。

森本は札幌農学校19期生（1901年卒業）で、1906－32年に北大で経済学などを教えた。論文「日本の『国民食料』」「衣服の改良」「住家の職務と住居費」（『生活問題』1920年）や、著書『家政学通論』（1949年）から分かるように、その研究は家政学に通じていた。


森本厚吉

そして、アメリカ留学の経験により、日本人の生活を科学的方法によって文化的なものに改めるべく努めた。経済的な住居スタイルとして日本初の洋式集合住宅「アパートメント」を設計・経営したのがその一つだ。

また、女性の軽視は経済的損失だとして、女子教育にも力を入れた。家庭経済の経営者たる女性には「高等常識」と「専門的職業上の知識」の教育が必要であると説き（「昭和時代の女子高等教育」1927年）、これを「家庭経済学」と名付けた（「経済観念の乏しい日本婦人」1929年）。

森本の研究は、家庭生活の合理化を目的とし、衣食住を中心とする点で、後の「家政学部」の内容とは少し異なる。ただ、女性の仕事とされていた分野を科学的に研究し、専門的な教育をしようとした点で、両者は方向性を同じくしていた。

＊

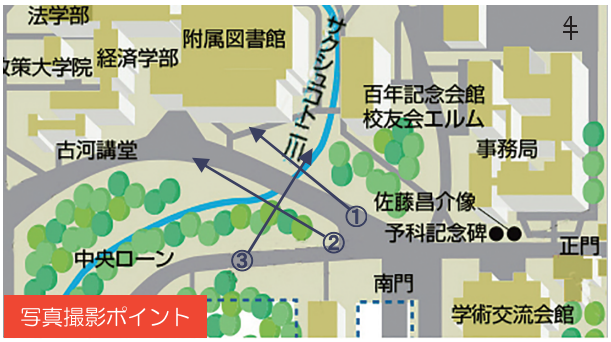
「家政学部」の計画は、翌1961年には、農学部内に「家政学科」を設ける方向へ変わっている（農学部教授会記録、1961年4月21日）。その際に要望書立案や渡米調査などの職務にあたったのが高倉新一郎（1902－1990）だ。高倉は農学部出身（1926年卒業）で、森本と同じ農業経済学科に属していた。高倉の在学期間は森本の在職期間と重なっており、影響をうけたとみていい。戦前に文系学部をもたなかった北大では、農学部の農業経済学科が経済学・社会学などの分野も担っており、そこに家政学の土壌が醸成されていったのであろう。

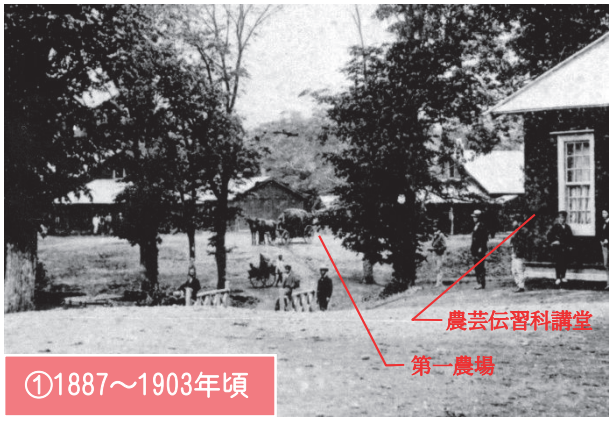
農業経済学及農政学教室
クラーク会館の北西側にあった

同年には、マサチューセッツ大学教授の来学や北大教員の渡米など、活発な準備活動が確認できる。しかし、計画はさらに「ホームエコノミックス実験室」（農学部教授会記録、1961年12月21日）に収束したとみえ、「家政学部」も「家政学科」も幻に終わった。

（参考）森本厚吉伝刊行会『森本厚吉』河出書房、1956年
常見育男『家政学成立史』光生館、1971年
（廣瀬）

北大風景グラフⅡ
橋の周辺(中央ローン北側)





（『写真集北大125年』より）

（『北大百年史　部局史』より）

（2018年11月21日撮影）

正門から進むと、附属図書館の手前でサクシュコトニ川に架かる橋にさしかかる。この橋は、このあたりがまだ札幌農学校ではなかった頃からほぼ同じ位置に架かっていた。一帯は、当初は札幌育種場で、敷地や建物が札幌農学校に移管されたのは1887年のことだった。

写真①が撮影された時期、農学校の校舎は北一～二条にあり、現在の正門から文系校舎にかけての敷地は農場として使われていた。写真の木橋の向こうに見えるのは、サクシュコトニ川西岸に広がっていた第一農場である。

写真右端の建物は、農芸伝習科(中等程度の付設実業教育機関)の教場で、ちょうど百年記念会館の南側の位置にあった。もとは札幌育種場の事務所（1884年新築）で、隣接する建物とともに農芸伝習科及び農場の施設となっていた。1903年に校舎が北八条へ移転し、正門から現在の農学部一帯が整備されて以降は本部庁舎に転用され、役割を終えたのは1966年のことである。増築や改修を繰り返しつつ、約80年にわたる使用に堪えていた。

移転から14年後に撮影された写真②は、川や道、橋の関係から現在と比較しやすいかもしれない。ただし、橋の周囲の建物は現在と大きく異なっている。

畜産学講堂は、西隣の古河講堂とともに1909年に竣工した。1914年には獣医学教室が増築され、その後も関連施設が北側に拡充していった。これらの建物は農学部畜産学科や獣医学部が使用し、続いて1960年から教養部が第三講堂として使用した後、1963年に取り壊しとなった。卒業生の中にはこの建物で過ごした記憶のある方もいることだろう。

畜産学講堂と入れ替わるように、1959－65年には附属図書館の建物が新営され、橋周辺の建物配置は1960年代に大きく変化した。写真③に見える附属図書館南棟は2011年の新築だが、外観は従来の建物の意匠を引き継ぎ、変わらぬ印象を保っている。

2018年11月20日、札幌は1890年に並ぶ統計開始以来最も遅い初雪を観測した。翌21日には、中央ローンやその周辺にも、うっすらと雪が降り積もった。

（佐々木）

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

学生の徽章　～間中俊夫氏寄贈資料から～

9月29日、ホームカミングデーの折に、間中俊夫氏から在学中(1958－62年)の資料18点をご寄贈いただきました。その中から、当時使用されていた3点の徽章をご紹介します。

①恵迪寮の徽章

①は恵迪寮の徽章で、エンレイソウをかたどった「寮生章」がついています。間中氏からは、入寮の際に手渡されたものだとお話をうかがいました。

②工学部の襟章

②は工学部の「T」形の襟章です。学生は、所属別に文字を表した襟章を身に着けていました。北大は「Faculty of Engineering」を工学部の英称としていますが、襟章には「Technology」の頭文字を採用したのでしょう。帝国大学として初めて制服・制帽を定めた東京大学やそれに倣った九州大学なども、工学部の襟章に「T」形を用いています。

③北海道大学の徽章

③は、エンレイソウの上に「大學」の文字をあしらった北大の徽章です。この図案は、1950年に農学部自治会が公募した「全学バッチ」の入選作で、北大のシンボルマークとして正式に定められたのは1996年のことです。　(佐々木)

恵迪寮祭での間中氏たち
(1958年頃、恵迪寮前にて)

襟元の徽章

北大童話研究会会誌『ドロの木』　～佐々木孝一氏寄贈資料から～

北大童話研究会会誌『ドロの木』は、佐々木孝一氏より10月15日に受贈した、同研究会にまつわる1960－80年代を中心とした資料の内のひとつです。

北大童話研究会は、児童文学の創作・研究活動や人形劇などの上演をおこなう学生サークルで、1955年に創設されました。創設期には、北海道の風土に取材した作品で知られる児童文学作家・加藤多一氏も参加されています。

この研究会は、児童文学の創作や研究をおこなう児童文学部と、人形劇を公演する文化部に分かれており、会員の作品は『ドロの木』などの会誌上で発表されていました。

『ドロの木』表紙
現在、大学文書館で所蔵するのはこの3点のみ

『ドロの木　特集号～20周年記念出版～』(1975年4月)は、研究会の創立20周年を記念して、1964－75年にかけて発表された創作作品の中から6人の作品を選んで編集したものです。巻末には、選考対象とした会誌18冊・102作品と作者の一覧が掲載され、1960年代から70年代前半にかけての童話研究会の創作活動を通覧できます。　(佐々木)

〔活動紹介〕 日誌 pick up

“2つの100年” 特別展示を開催

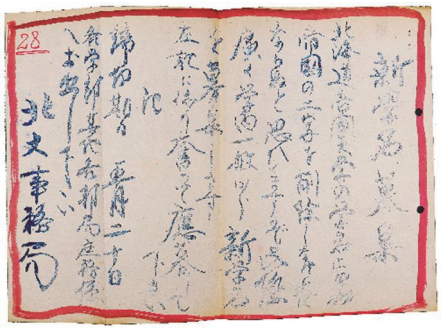
オープンキャンパス（8月5－6日）とホームカミングデー（9月29－30日）において、“2つの100年”をテーマとした特別企画展示をおこないました。

“北大”の愛称 100 年

「札幌農学校」「東北帝国大学農科大学」を経て、1918年4月、**「北海道帝国大学」が誕生**しました。通称としての“北大”の始まりです。

以前には、**宮部金吾宛て廣井勇書簡**（1888年）で「Sapporo Polytechnic Institute」（札幌技術専門大学）、**「札幌農学校ヲ農科大学ニ改ムル案」**（1902年）で「札幌帝国農科大学」などの名称案も出ていました。

また、**“北大”アナザーストーリー**として、国内外の“北大”を紹介しました。北京大学や台北大学の通称だったり、公文書では東北大学の略称だったり（北海道大学は「海大」）、北陸大学の大学祭も「北大祭」だったり、さまざまな“北大”があります。



「新学名募集」のポスター（1947年）
戦後の大学制度改革の一環として、新しい大学名を募集した

女性の北大入学 100 年

本間ヤス直筆の図鑑原稿
本間ヤス（1920年全科選科入学）はウドンコ菌を研究した。原稿は後に大谷吉雄『日本菌類誌』第3巻第2号として出版された

戦前の教育制度が女性の大学進学を想定しない中、1918年9月、加藤セチが**北大における初めての女子学生**として入学（全科選科生）を果たしました。

加藤セチは佐藤昌介学長の「私の大学は門戸を開放いたします」という演説を聞いて入学を決意したと回想しています。展示では、その**大学の門戸開放の演説文**（1918年）もあわせて陳列しました。

その後も理学部を中心に女子学生が入学します。**卒業証書授与式「読上簿」**（1943年）の数学科と植物学科の代表には渡邊雅や武宮史枝（金三純）の名がみえ、実力で入学を勝ち取った女性たちの優秀さがよく分かります。

（廣瀬）

編集準備室日誌

2018. 7.20. カルチャーナイトにて夜間特別開館
2018. 8. 3. webページをリニューアル
2018. 8. 5. オープンキャンパスにて特別企画展示・資料展示解説ツアー（～6日）
2018. 9.29. ホームカミングデーにて特別企画展示（～30日）
2018.10.10. 全国大学史資料協議会2018年度総会・全国研究会（於：九州大学）出席（室員3名）（～12日）
2018.11.19. 東北大学史料館視察（室員3名）
2018.12. 4. 東京大学文書館視察（室員3名）

資料の収集・保存にご協力を

探しています　周年記念事業の資料

北海道大学では、創基125周年記念事業(2001年)をはじめ、節目ごとに**周年記念の式典**や**講演会・展示会の開催**、**建物の新築**、**構内環境の整備**などをおこなってきました。周年記念事業をめぐる**写真**や**映像**、**配布物**などの各種資料を探しています！

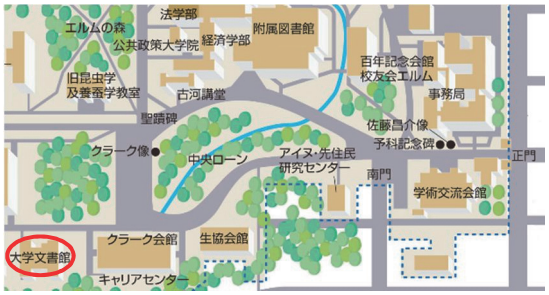
（上田稔氏寄贈資料より）

▲ 創基90周年を記念した沿革資料・写真展示会
附属図書館玄関棟3階（現在のラウンジ）で開催された

◀ 上記展示会のパンフレット
解説からは、W.S.クラークの雇用契約書や内村鑑三の魚類目録など、貴重な資料が展示されていたことがうかがえる

編集後記

◇本号巻頭は、1962年度入学者である逸見勝亮名誉教授にご執筆いただきました。
◇表紙では、研究・学習の場や全学的イベントの会場など、多様な役割を果たす図書館の外観と内観の変遷を追いました。2010年代の写真は附属図書館からのご提供です。

表紙図版〔上下順〕――図書館の遷り変わり
- 北一条キャンパス時代の農学校図書館(1903年)
- 赤煉瓦造の書庫を擁した白亜の図書館(1911年頃)
- 式典の会場にもなった図書館読書室(1910年頃)
- 左奥には増築した鉄筋コンクリート造の書庫(1926年頃)
- スズラン形のシャンデリアがかかる閲覧室(1929年頃)
- 7年がかりで新営された附属図書館(1965年頃)
- 「行きとどいた照明と明るいムード」で好評の閲覧室(1980年頃)
- 改修された玄関棟と増築された南棟(2017年頃)
- グループ学習ができる南棟オープンエリア(2013年頃)

北海道大学150年史編集ニュース　第２号
発行日　：2019年1月31日
編集・発行：北海道大学150年史編集準備室
〒060-0808
札幌市北区北8条西8丁目
北海道大学大学文書館内
開室日　：平日（月～金）9:30～16:30
（祝日、年末年始12/29～1/3を除く）
TEL/FAX　：011－706－2395
E-mail　：hu150@archives.hokudai.ac.jp
URL　：https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html